資 料

乳幼児における要求伝達手段の調整過程**

——聞き手からのフィードバックとの関連で——

木 下 孝 司*

THE REGULATORY PROCESS OF COMMUNICATIVE MEANS FOR
REQUEST IN THE YOUNG CHILDREN

——In relation to the listener's feedback——

Takashi KINOSHITA

The purpose of the present study was to investigate how young children regulate their communicative means for request in response to a listener's feedback. 56 children (range; 0:10-2:6) and a tester were videotaped in three kinds of structured "frustration" settings. Major results were as follows. (1) Children older than 1:6 could regulate their communicative means and try hard to clarify their requests against the ignoring listener. (2) From 1:10, in addition to the above-stated regulation, children began to regulate their social relation with the listener. Furthermore, some two-year-old children began to be sensitive to the listener's point of view and soften their requests. (3) At 1:2-1:5, children could not regulate their communicative means by themselves but could regulate them in response to the listener's feedback. In this case, this feedback was considered to function as a kind of "scaffolding".

Key words: listener's feedback, regulation, communicative means, request, young children.

問 題

近年、言語発達研究に語用論 (pragmatics) 的アプローチが導入され、その研究対象は低年齢化してきている。それらの研究によると、乳児の側からの意図的な伝達は生後9, 10か月ごろより開始するとされている (例えば, Bates, 1979)。

要求伝達は、この意図的な伝達の基本的なもののひとつである。要求伝達行動の乳児期から幼児期にかけての発達について、観察法によるもの (Bruner, Roy, & Ra-

tner, 1982 等), 日誌法によるもの (山田, 1982), 実験的統制場面によるもの (Harding & Golinkoff 1979) などの研究がある。これらの研究より、その主な伝達手段の発達的变化は、欲しいものにリーチングするだけ→大人への注視・発声をリーチングに複合→慣用的手段 (指さし) の使用→言語の使用とまとめられる。

ところで、伝達行動を考える場合、対物的な行動と異なり相手からのフィードバックが多様であるという独自性を考えなくてはならない。特に、要求伝達の場合、「要求実現のためには、どのような手段が必要かという判断」(村井, 1970), つまり、聞き手との関係やその反応をとらえ、それに応じて伝達手段を調整するといった実践的能力 (pragmatic ability) が重要なものとしてあるといえる。この点において、先述の研究では新たにどのような伝達手段が獲得されてくるのかという点でまとめられており、実際に子どもは、聞き手との関係で伝達手段

* 京都大学 (Department of Educational Psychology, Graduate School of Education, Kyoto University)

** 本論文の作成にあたり、御指導いただきました京都大学教育学部 坂野登教授に深く感謝致します。また、研究に協力して頂いた保育園の方々、そして子どもたちに深く感謝致します。

を使い分け、要求をより効果的に伝えているかという点での分析は今後の課題として残されているといえる。

Wellman & Lempers (1977) によると、2歳児は自然場面において聞き手からのフィードバックに応じて自分の発話内容を変化させているとしている。また、Wilcox & Webster (1980) でも、17～24か月児が聞き手からの“what?”というようなフィードバックに発話内容を変化させたり、繰り返したりして反応することを明らかにしている。これらの研究は、まだ自己中心性が強いと考えられる早い時期でもすでにかなり社会的な伝達が行なわれていることを示すものだが、分析対象を発話に限定せず非言語的手段も含めてみると、さらに低年齢に遡って聞き手のフィードバックへの反応過程が検討できよう。

以上は、聞き手のフィードバックがあつてからの反応であつたが、子どもの側からあらかじめ聞き手をどう意識し伝達手段を調整するのかという点ではどうであろう。Bates (1976) によると、2歳半ごろまでに相手を意識して要求発話のイントネーションを弱めたり、“please”という語を入れて要求表現を柔らげるとしている。少なくとも2歳児では、聞き手との関係に応じた調整はみられると考えられるが、そこに到る発達の過程は明らかにされていない。Axia & Baroni (1985) は、年長児の発話の「丁寧さ (politeness)」という新たな skill をひきだすため、子どもの要求行動に対して何のフィードバックも返さず無視するという条件を設定している。これと同様の条件を設定するならば、聞き手を意識した伝達手段の調整を不可欠とする場面状況を作り、聞き手との関係に応じた伝達手段の調整過程を分析することができよう。

本研究では、統制場面を設定し乳幼児の要求伝達行動について観察する。その際、要求の聞き手との関係で、子どもは自己の要求伝達手段をどのように調整して使用しているのかについて、(a)聞き手からのフィードバックのない状態で子どもから聞き手をどうとらえ、伝達手段を調整するのか、(b)聞き手からの「～ちゃん、何?」といった漠然としたフィードバックに対して伝達手段をいかに調整し応じるのか、の2つの点から分析し、さらにその両者の発達の過程の関連についても検討することを目的とする。

Bruner et al. (1982) は、母子の自然観察を通して、子どもをより適切な文脈に引き込み効果的な伝達を促すものとして、相互作用での大人からの様々な発話を重視している。このような点から、本研究でも聞き手からのフィードバックがあつて初めて伝達手段を調整していた

のが、自ら一人でそれが可能になり、さらにその聞き手が内在化され、始めから聞き手をより意識した要求伝達の仕方に変えていくという発達の変化が予想できる。

方 法

(1)被験児 京都市内6か所の保育園に在園する10か月から2歳6か月の乳幼児56名。山田(1982)等を参考に次の5群に分けた。Ⅰ群12名(男6名、女6名、0:10-1:1、平均0:11)、Ⅱ群13名(男7名、女6名、1:2-1:5、平均1:3)、Ⅲ群13名(男7名、女6名、1:6-1:9、平均1:7)、Ⅳ群11名(男6名、女5名、1:10-2:1、平均1:11)、Ⅴ群7名(男3名、女4名、2:2-2:6、平均2:4)。

(2)実験条件 Harding & Golinkoff (1979) で実施された、玩具を取り上げるなどで欲求不満事態を作り要求伝達を引き出す方法を参考に以下の3条件を設定した。

条件1〈遠くで操作・無視〉:玩具(ガラガラ、赤色の自動車)を被験児の手の届かない所に提示して、30秒間検査者が操作をする。その間、検査者は玩具の方だけ見て被験児の反応は無視する。

条件2〈近くに提示・無視〉:初めに玩具(鐘、タンバリン)を約10秒演示してみせるその後、検査者は被験児の手の届く範囲内に被験児には手渡さないように手に持ったまま提示しておく。そして、検査者は30秒間下を向いて被験児の反応を無視しておく。

条件3〈遠くで操作・ことばかけ〉:初めに玩具(おきあがりこぼし、ねじ巻き式で動く犬のぬいぐるみ)*を被験児の反応を無視して操作する。そして、被験児の要求行動が確認された約3秒後、被験児の方を見て「～ちゃん、何」ということばかけをしりあがり調のイントネーションで行う。ことばかけは、3～4秒の間隔で2回行う。

条件1、3は、自己の伝達手段の調整過程を言語的フィードバックの有無でどう変化させるかをみるために設定した。条件2では、被験児は要求伝達をする前に自ら要求実現のための努力が可能であり(自分で取ろうとする)、このような事態でも、相手を意識しながら要求の伝達をするのかみようとするものである。

(3)手続 検査者は、実験開始前平均して5、6日保育に参加し、被験児とラポールをとり、ラポールのとれたと思われる子どもから1対1の統制場面での実験を行った。場所は、保育室の一週で他児の邪魔の入らないようにして行い、実験時間は、空腹でも眠くもない午後の

* 1:2、1:7の2人の被験児が、この犬の玩具には特に要求行動を示さなかったため、紐を引くと耳が動き鳴き声をだす犬の玩具を使い、その際要求行動は引き出した。

おやつ後の自由時間にした*。実験は、被験児を子ども用の机に向かって椅子に座らせ、検査者はその斜め横に座って実施した。被験児の目の高さは検査者の顔の約20cm下に位置し、視線の方向がわかりやすいようにした。

始めに、場面への慣れを形成し検査者とのやりとりを活性化させるために、新版K式発達検査の数項目を実施した。そして、上記の条件を各々2試行ずつ、試行順序は被験児間でカウンターバランスして実施した。ただし、各試行は続けて行わず、その間では材料の玩具で遊んだり発達検査の項目をしたりして、全体に検査者と被験児がいっしょに遊んでいる場面を設定した。全所要時間は1人15～20分であり、またこの間は、全てVTR記録をした。

また、この実験的研究に合わせて、補助資料として保育者に対して各被験児の日常生活での要求行動についてのアンケートも実施した。

(5)評定と記録 0.1秒単位の時刻をビデオタイマーによって入れたVTR記録から、次の各項目をチェックした。

(A) 手の活動～①リーチング、②指さし、③「チョウダイ」の身振り(両手のひらを上にに向けて合わせた身振り)
(B) 視線の方向～①玩具、②検査者(但し、検査者の顔への注視)、③その他、(C) 発声・発語～①発声(カタカナで表記)、②発語(第三者にも確認される有意味語)、(D) その他(具体的に記述)

条件1, 2では、各試行30秒間の観察時間を1秒ごとにチェックするタイムサンプリング法を用いるとともに、各項目での変化点(例:リーチングをしていたのが指さしに変化)、初めての発語までの時間についても測定した。条件3では、検査者がことばかけをする直前、直後それぞれ1秒以内の反応についてチェックした。

被験児のうち10名をランダムに選び筆者と別の評定者(発達心理学専攻者)とが評定したところ、チェック項目の一致率は高かった(95.2%)ので残りの被験児については筆者が1人で評定を行った。

結果と考察

* ラポール形成は、食事、排せつなどの援助を拒否しない、ものを介した遊びができるなどで判断した。本研究の保育園児の場合、0歳から比較的多様な社会的関係の中にいることもあって、ごく一部(20～25人中1人ぐらゐの出現率; 3人いたが、当初より実験対象とせず)を除きラポール形成が良好であったと考えられる。また、実験場面の導入は被験児のペースに合わせたこと、場所の日常性もあって、極度の緊張はなかった。

各被験児とも各条件で、リーチングあるいは直接取ろうとするなどの要求行動を示し、また、試行終了後すぐにこれらの玩具を操作することが確認された。このことから、被験児の玩具を操作したいという要求を引き出す実験意図は満足されたといつてよい**。

(1)伝達手段の調整について 条件1において、伝達手段をどのように調整して伝達を行っているか検討する。ここでいう伝達手段の調整とは、手の活動レベルで(a)リーチング→指さしまたは「チョウダイ」身振り、(b)「チョウダイ」身振り→指さしといった形態的には間接性の大きい手段への変化を、発声・発語レベルでは(a)発声→発語、(b)発語内容の変化を、具体的には指す。TABLE 1には、2試行中少なくとも1回はそれぞれの調整を見せた被験児の人数を示した。

手の活動、発声・発語のどちらかでこの伝達手段の調整をするものは、1歳前半では全体に少ないが、Ⅲ群(1:6-1:9)以降では70%以上の被験児でみられた。Ⅱ-Ⅲ群間では有意な差がみられ($\chi^2=5.57$, $df=1$, $p<.05$)、この伝達手段の調整は1歳半ごろを境にみられるようになると考えられる。こうした傾向は、手の活動、発声・発語レベル別にみても同様にみられる。

手の活動レベルについてみると、1歳前半ではリーチングを断続的に使用する者がほとんどであり、伝達手段の調整をする者は少ない。実験的研究に合わせて実施した「要求行動に関するアンケート」によると、2名(年齢は、0:10, 0:11)を除いて「要求の指さし」は全被験児に確認されており、またこれは「要求の指さし」は10か月前後よりみられるとする研究(小松, 1978等)とも対応している。つまり、1歳前半の被験児も要求伝達行動レパートリイに指さしを持っているにもかかわらず、それを特定の場面・状況に依存せず、実践的に使用することが困難であったことが予想される。

TABLE 2には、発語内容の変化について各パターンの人数が示してある。ここで特徴的であったのは、TABLE 2の1, 2のように統語上は一語文、二語文の違いはあるものの、発語内容を変化させ要求語(チョウダイなど)と対象語(ここではブーブーなど)をともに言明していることである。Ⅲ群(1:6-1:9)では、この変化を示す者は2名だけだが、Ⅳ群(1:10-2:1)では8名と増加しⅢ-Ⅳ群間で有意差が認められた($\chi^2=3.91$, $df=1$, $p<.05$)。手の活動を中心とした伝達手段の調整による要求の明確化は1歳半以降でみられたが、1:10以降になると、「要求伝達において伝えなくてはならない2つの要素、つま

** 性別、年齢による要求の強さの差は観察されなかった。

TABLE 1 条件1において伝達手段調整がみられた被験児の人数

年 齢 群 (range)	I (0:10-1:1)	II (1:2-1:5)	III (1:6-1:9)	IV (1:10-2:1)	V (2:2-2:6)
手の活動での調整	1 (8.3)	3 (23.1)	9 (69.2)	10 (90.9)	4 (57.1)
発声・発語での調整	0 (0.0)	1 (7.6)	7 (53.8)	11 (100.0)	7 (100.0)
上記のうち少なくとも一方	1 (8.3)	4 (30.8)	10 (76.9)	11 (100.0)	7 (100.0)

() 内は、各群での割合を示す

TABLE 2 発語内容の変化の内訳

年 齢 群 (range)	II (1:2-1:5)	III (1:6-1:9)	IV (1:10-2:1)	V (2:2-2:6)
N=発語のみられた被験児数	N=1	N=10	N=11	N=7
要求語→対象語(または、その逆)	0 (0.0)	1 (10.0)	2 (18.2)	1 (14.3)
要求語 (対象語) →対象語+要求語	0 (0.0)	2 (20.0)	6 (54.5)	6 (85.7)
上記のうち少なくとも一方	0 (0.0)	2 (20.0)	8 (72.7)	7 (100.0)
強めの助詞を付加 (EX.「ホチイ」→「ホチイノ」)	0 (0.0)	2 (20.0)	1 (9.1)	1 (14.3)
イントネーションを変化させて 了承を得るようにする反応	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (42.9)

() 内は、発語のみられる被験児中での割合を示す

り要求意図と要求対象」(Bruner et al. 1982)を言語的に明示して、無視する相手に対して要求をより明確化して伝えようとしているといつてよい。要求の明確化という点では、人数は少ないながらも「ノ」とか「ヤ」といった強めの助詞を付加するものがいたのも特徴的であった。

V群(2:1-2:6)になると、この要求の明確化の方向とは異質な調整がみられるようになっていく。それは、「ブーブーチョウダイ」と強くいつていたのが「コレ、オニーチャンノブーブー」と検査者と玩具を交互に見ては言ったり、「ブーブーイイ」としり上がり調のイントネーションで検査者に聞き、相手に了承を得るような要求の出しかたをするものである。この反応を示す者は、V群に限って3名おり、それ以前のIV群とは差の傾向がみられる(直接法による、 $p=.086$)。Bates (1976)は、2歳半にかけて要求の柔らげがみられるとしていたが、本研究でみられたこの反応も同種のものであり要求する相手の視点をかなり意識したものとして考えられる。

(2)言語の社会的調整機能の芽生え 次に、要求表現の変化での「要求の柔らげ」に先立つ、言語の社会的調整機能について検討する。これを考える手掛かりとして、

ここでは初めて言語を用いるまでの時間を指標にして条件1, 2での言語の使われ方の比較を行った。TABLE 3には、条件1, 2について言語で要求伝達をしたもののうち、初めて言語を用いるまでの時間の平均を示した。各値を対数変換をして2(条件)×3(年齢群)の分散分析にかけたところ、有意な年齢の主効果($F(2,23)=15.69, p<.001$)と交互作用($F(2,23)=4.19, p<.05$)がみられた。具体的に状況に即してみるなら、III群(1:6-1:9)の被験児の場合、条件2のような自分での要求実現の可能な場面では検査者の手から無理やり玩具を取ろうと努力し、それがうまくいかないとして初めて発語で要求を出している。一方、IV, V群(1:10-)になると比較的早くで発語をし、直接玩具を取ろうとすることは少なくなっ

てきている。それが、このような差となっていると考えられる。要求表現自体を柔らげるのは2:1ごろ以降にならないとみられないが、すでに1:10のところよりは、言語自体、要求実現のための手段としてだけでなく他者との社会的調整の機能がみられはじめ、それが2:1以降の新たな変化と結び付くと考えられる。

TABLE 3 初回の発語までの時間

年齢群 (range)	III (1:6-1:9)	IV (1:10-2:1)	V (2:2-2:6)
条件 1	7.9	5.9	4.6
条件 2	16.5	5.2	4.1

単位は秒

(3)聞き手からのフィードバックに対する反応 TABLE 4には、条件3において検査者がことばかけをする前と後の伝達手段の変化について示してある。少なくとも1回は検査者のことばかけに対して伝達手段を変化させ応じる者は、I群(-1:1)では1名(8.3%)であるのに対して、II群(1:2-1:5)では8名(61.5%)と増加しており有意差が認められた(直接法による、 $p=.016$)。変化の

TABLE 4 聞き手からのフィードバックを受けて伝達手段を調整する被験児の人数

年 齢 群 (range)	I (0:10-1:1)	II (1:2-1:5)	III (1:6-1:9)	IV (1:10-2:1)	V (2:2-2:6)
リーチング→指さし(または チョウダイ身振り)への変化	1 (8.3)	6 (46.2)	6 (46.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
発語が新たに付加	0 (0.0)	3 (23.1)	4 (30.8)	9 (75.0)	3 (42.9)
発語内容の変化	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (30.8)	6 (54.5)	6 (85.7)
上記のうち少なくとも どれかの変化	1 (8.3)	9 (61.5)	12 (92.3)	13 (100.0)	7 (100.0)

() 内は、各群での割合を示す

TABLE 5 本研究で得られた結果の概要

年 齢	1:0	1:6	2:0	2:6
伝達手段の 調整の発達 的变化	〔聞き手のフィードバック に対して伝達手段の調整〕			
	要求の明確化			
	〔伝達手段の自己調整〕			
	対人間の調整を含んだ要求伝達 要求表現の柔らげ			

内容としては、対象を実際に取り実践的行為に近いリーチングを用いた伝達であったのから、より間接性の大きい指さしや発語を用いた伝達に変化するもの、または発語内容の変化*になっている。II群(1:2-1:5)の被験児は、条件1では自分から伝達手段の調整をすることはなかったのに対して、条件3のように聞き手のフィードバックに対して伝達手段の調整をする者が多くなっているのは特徴的である。

Wilcox & Webster (1980) では、発語内容の変化について聞き手からのフィードバックの効果をみていたが、非言語的伝達手段をも分析の対象にしたところ、言語が中心的手段になる以前の1:2頃よりその反応がみられることがわかった。条件1の場合、1歳前半では伝達手段の調整はみられず指さしの使用も少なかった。これは、伝達手段が特定の文脈・場面に依存していることが考えられたが、聞き手が言語的フィードバックを返すことは被験児に伝達の相手を意識させ伝達のための文脈に引き入れて、いわば足場をつくる(scaffolding, Bruner et al. 1982)効果があると考えられる。

ま と め

本研究で得られた結果をまとめると、TABLE5のよう

* ことばかけ前後ともに発語している被験児の全てが、その発語内容を変化させ、結局、要求語・対象語のどちらも言語化していた。

になる。

伝達手段を自ら調整しつつ使う実践的使用にかかわる能力は、1歳半をひとつの境にみられた。Snyder (1978)によると、言語発達遅滞児(language disabled children)の場合、一定の語彙数を持ちながら実践的に使い分けすることができないとし、その能力は認知発達という手段—目的関係(means-end relation)の理解と相関が高いとしている。本研究での

伝達手段の調整というのも、状況に応じて手段を変えるという意味で手段—目的関係理解とも構造的に共通するところもあり、その発達は1歳半を中心とした認知発達との関連が予想される。

次に、子ども自ら伝達手段を調整する過程と聞き手からのフィードバックに対して伝達手段を調整する過程との関連について述べておく。1歳前半から1歳後半への変化を大きくみると、始めは聞き手からのことばかけがあっても伝達手段の調整をしない→聞き手からのことばかけ、即ち大人の側からの「足場づくり」があって伝達手段の調整が可能になる→ひとりでも可能という図式が考えられる。この過程において、より高次の伝達手段は大人との間で大人の支えのもとに出現し、次に子ども個人内に定着すると考えられる。つまり、一口に伝達行動といっても、大人との間での文脈、個人内レベルでその出現の時期や機能にはズレがみられることになる。この間、言語も含めた伝達行動と認知発達との相関をみた研究がいくつかあるが、そのうち相関がみられたもの(例えば、Snyder, 1978)、みられないもの(例えば、Rowan, Leonard, Chapman & Weiss, 1983)と安定した結果が得られないのも、ひとつには伝達手段の評価をここで指摘したどのレベルでするのか一致していないためであろう。

最後に、本研究でとった実験の方法についてその妥当性について触れておく。大人との伝達場面の場合、日常生活の中で大人の側は常に意図的であれ無意図的であれ、

子どもの言語発達についてのある仮説を持ち働きかけを行っている。そうした大人の側の働きかけについての分析も母子相互作用の研究を中心にすすんできているが、子どもの発達の内的条件との関わり—子どもの発達上、外的働きかけはいつ効果を持つのか等—について整理する上で実験的方法も有効であろう。無論、そこで得られた発達の特徴を子どもの日常場面での問題にもどして検討することは必要である。

例えば、1歳過ぎより1歳半ごろにかけて、一方的な要求の出しかたをするいわゆる「カンが強い」とされる現象が保育場面等で指摘されている。これは、自我発達の端緒として捉えられるものだが、本研究でみた伝達手段の調整ができないことと裏表の関係にあるものとしても理解でき、こうしたところからも日常生活とこの統制場面との対応が考えられる。但し、今回は要求伝達の手段の調整という面に限定しており、要求伝達の内容、特に要求内容に応じてどのように伝えるべき相手を使い分けるかという点に関しては検討できなかった。この点は、1, 2歳児の場合、人間関係の広がりに伴って、日常場面のなかで重要なものとなってくることが考えられ、今後の課題として残されているものである。

引用文献

- Axia, G., & Baroni, M.R. 1985 Linguistic politeness at different age level. *Child Development*, **56**, 918-927.
- Bates, E. 1976 Language and context: The acquisition of pragmatics. New York: Academic Press.
- Bates, E. 1979 The emergence of symbols: Cognition and communication in infancy. New York: Academic Press.
- Bruner, J.S., Roy, C., & Ratner, N. 1982 The beginnings of request. In K.E. Nelson (Ed.), *Children's language*, Vol. 3. Lawrence Erlbaum Association.
- Harding, C.G., & Golinkoff, R.M. 1979 The origins of intentional vocalization in prelinguistic infant. *Child Development*, **50**, 33-40.
- 小松教之 1978 指示行動の発達とその障害(そのI): 普通児, 蒙古症児, 自閉的傾向児の場合 京都教育大学紀要, Ser. A, **53**, 47-71.
- 村井潤一 1970 言語機能の形成と発達 風間書房
- Rowan, L.E., Leonard, L.B., Chapman, K., & Weiss, A.L. 1983 Performative and presuppositional skills in language-disordered and normal children. *Journal of Speech and Hearing Research*, **26**, 97-106.
- Snyder, L.S. 1978 Communicative and cognitive abilities and disabilities in the sensorimotor period. *Merrill-Palmer Quarterly*, **24**, 161-180.
- Wellman, H.M., & Lempers, J.D. 1977 The naturalistic communicative abilities of two-year-olds. *Child Development*, **48**, 1052-1057.
- Wilcox, M., & Webster, E.J. 1980 Early discourse behavior: An analysis of children's response to listener feedback. *Child Development*, **51**, 1120-1125.
- 山田洋子 1982 0~2歳における要求一拒否と自己の発達 教育心理学研究 **30**, 128-137.

(1987年1月12日受稿)